（2013/ 2/2）

The Renaissance king：Francis I　　ルネサンスの王：フランソワ１世

p,217～

王室につらなる諸侯たちはいつもガリア教会（ノートルダム）の一流のパトロンであった。とはいえ、大聖堂への彼らの寄付を比較してみると、大修道院や聖堂参事会教会を大きく超えることはなかった。彼らの贈り物はしばしば芸術的、音楽的、または土地やお金に加え精神的価値の形式を取ることもあった。豪華な時禱書で有名なベリー公ジャン（＝１世、Duke John of Berry）は恐らく中世後期における芸術の最も著名なパトロンであるが、例えばノートルダムに使徒フィリポの頭を含む多くの聖遺物を入れる聖櫃を寄贈した。1400 年の記録に拠れば、ベリー公は大聖堂のオルガン改装費用の寄付を依頼され、またオルガン製作家のフレデリク・シャンバンツ Federicus Schambantz を教会に仕えさせるため、6 年間にわたりスポンサーとなった。そのすぐ後の 1410 年、ジャンの甥ブルゴーニュ公ジャン（１世、＝無怖公 Jhon the Fearless）は 2,500 リーブルをノートルダムに寄付したが、それはブルゴーニュ公家の先祖の（供養の）ためであった。
ルイ 11 世（在位 1461～76）はその治世の間に、ノートルダムに多大な善行を積んだ。つまり、父（シャルル 7 世）が約束していた 600 リーブルに加え、自身の分として 1,000 リーブルを、また「ガブリエル」の銘がついた北塔の大鐘を作り直す材料と費用を寄付した。（→2013 年、フランス革命以降初めて鐘が 10 個揃うこととなった。）ほかにも「聖アンドレアの腕」を安置するための新しい聖遺物入れを作るために 502 エキュを寄付した。このような莫大な寄付は無条件でなされたのではなかった。実際、それらの惜しみない寄付は大聖堂と宮廷にとって、お互いのより大きな見返りの言わば、交換条件であった。多くの場合、教会への寄付の最大の意味は、現世だけでなく来世についてもその奉仕の対価としてのものであった。宗教改革以前においてパリの大聖堂との関わりを持ったフランスのすべての君主たちの中でも、フランソワ１世（在位 1515～47 年）は宮廷と大聖堂との関わりにおいて、最も精力的に相互関係を築いた典型的な人物であった。

おそらく、フランソワ１世はフランス史上、最も傑出した君主の一人であり、その治世は二つの輝かしい文化、すなわちフランス・ゴシックとイタリア・ルネサンスの混在した時代であった。フランソワ１世はノートルダムの建物の外見自体にも影響を与え、また教会の組織そのものにも関与した。彼は即位して間もない若い頃、レオナルド・ダ・ヴィンチや画家のベンヴェヌート・チェリーニ Benvenuto Cellini を宮廷に招聘した。またラブレーRabelais のパトロンとなり、コレージュ・ド・フランスを設立（設立当初はコレージュ・ド・ロワイヤル Collége de Royale）した。彼はトルネをかけて英国王ヘンリー8 世と戦い、また（選挙には敗れたが）神聖ローマ皇帝にも立候補した。イタリアに 2 回侵攻、新大陸へフランスの最初の探検隊を送った。フランソワ１世の精力的な活動と国王という地位は

西ヨーロッパ全体に影響を及ぼし、各国君主はこれを念頭に置きながら外交戦略を考えることになる。その結果、フランソワ１世の家族の儀式だけでなく、主だったヨーロッパ王室の儀式は首都パリの大聖堂で同盟国・敵国を問わず、様々な儀式（外交儀礼）が行われた。フランス王室関係では、先王ルイ 12 世の葬儀（1515)、フランソワ１世の最初の妻クロード※１の葬儀（1524)、フランソワの母ルイーズ・ド・サヴォアの葬儀（1531）などである。もっとも遺体は伝統に従ってサン・ドニに運ばれた。対外的には、1537 年、スコットランド国王ジェームス 5 世を迎え※2、また神聖ローマ皇帝カール 5 世と一緒にミサを行った。また彼は敵であった神聖ローマ皇帝カール 5 世が 1519 年に、英国王ヘンリー8 世が 1547 年に、それぞれ亡くなった時に記念のミサを行った。

※１ クロード・ド・フランス Claude de France（1499 – 1524）ルイ 12 世の王女。

※２ この年、フランソワ１世の王女マドレーヌ Madeleine of Valois との結婚が大聖堂で行われた。

このような外交儀礼として華やかな儀式を行うため、ノートルダムはその会場としてふさわしくあるため、1518 から 1519 年の冬に改築させられることになった。
1518 年 12 月 10 日、フランソワ１世の使者が参事会にやってきて、王の命令として、このたびヘンリー8 世との平和条約を結ぶにあたり、多数の政府高官や英国の大使が出席できるような華やかな式典を、大聖堂の祭壇の前で行うことが出来るように、内陣と祭壇の間にある石の壁※を取り壊すことを伝えた。王の考えは、王国の第一の教会の主祭壇の前で忠節を誓うことが必要であるということだった。このことは彼らの教会を完全に保存し、その上彼らの王への忠誠心を実証するやり方ではあったが、当時の審議記録は参事会員たちの困惑を以下に伝えている。

※聖歌隊席の前の場所にあった石の壁。P,10 挿絵参照。挿絵ではこの石の間仕切りを取った後に造られた金属の間仕切りが描かれている。

ナンシー公ガブリエル・ド・シャストレ Gabriel de la Chastre が参事会に「我らの王に代わって王の意向を伝える。近々、パリの教会において、名誉ある英国王の大使を歓迎することが決定した。また出来るだけ輝かしい式典にするため、聖歌隊と内陣の間にある石の間仕切り壁を取り壊す必要があることは明白である」と伝えた。国王によって石の壁を取り壊すために工事作業員が派遣された。しかし、彼らは参事会の許可がないと工事が出来ないと言ったので、シャストレは参事会の許可を求めに来たのだった。参事会は、大聖堂は既に完璧に造られているので壁を壊すようなことは大変な損失である、として拒絶した。しかしシャストレは、再建費用は国王持ちで造り直し、しかももっと贅を尽くした立派な壁になるのだし、国王の命令は好むと好まざるとに関わらず、実行されるのである、と宣言した。参事会は仕方なく壊すことを受け入れた。
このような権力による強引な説得は論議を引き起こした。参事会は結局、王の要求に応じたが、それと同時に王が経費を払い、壁を再構築する保証を得た。まもなく石の壁は取り

壊され、その場所に一時的に、金糸で縫い取りしたフランソワ 1 世を象徴するサラマンダーの意匠で飾られた大きなテントが立てられたが、程なくその王室のパビリオンは取り壊された。作曲家のピエール・ムートンとアントワーヌ・ド・ロングバルを含む四人の委員は、壁を再構築するための計画を立てるため国王の母のもとに遣わされた。

全くの偶然だが、間仕切り壁を取り壊したことで、皇帝マクシミリアンの記念葬儀の準備を容易にできるようになった。２月７日、国王は彼の派遣した工事作業員が、マクシミリアンの遺体の模型を納める棺台を作るにあたり、一時的な作業場を確保するためサン・ドニ・ド・デュパ教会近くの回廊に作業場を作ることについて、参事会の同意を取り付けた。2 月 21 日、聖歌隊によるレクイエムの歌われる中、棺台は教会の中に運び込まれ、国王と宮廷の人々の前でレクイエムが歌われた。
参事会・聴罪司祭とドミニコ会士ギヨーム・プチ Guillaume Petit の間で訴訟手続きが行われた。彼は儀式当日、内陣の壁を飾っていた豪華なベロア地の飾り布を貰う権利があると強弁した。ピエール・ムートンは参事会の代理人として王に仲裁を要請した。
この記念葬儀の後は、石の間仕切り壁の代わりに銅の間仕切りが造られたが、完成するまで 25 年も経過したし、当時最も有名な二人のイタリア人の芸術家を巻き込んだ訴訟に発展した。新しい間仕切りと同時に低い石のパーテーションも設置されたが、石の間仕切りが撤去されたことと併せ、聖歌隊の音響効果にはさほど影響はなかった。しかし、教会の近代化という長い過程においてそれは徐々に意味を持つようになり、特に啓蒙主義の時代に入る最初のきっかけとなった。

もしフランソワ 1 世が内気で消極的な人物であったなら、建物の構造の改変を参事会へ要求することはなかったであろう。彼は典礼について若干の要求をすることに、何ら良心の呵責は感じなかった。彼以前の多くの国王は彼のために祈ることを願い、参事会は通常の一連の請願を行っていた。しかし、フランソワは前国王より頻繁に彼に代わって国王のための執り成しの儀式を行うよう望んだ。また、教会の周辺で、多くの通常のプロセッション（行列）を命じた。重要な機会、例えば 1515 年 4 月、フランソワ即位の年、ヘンリー 8 世と当時大公だったカールとの平和条約を締結した時、1517 年 8 月王妃クロードの懐妊の時、1526 年 4 月、イタリアでの敗戦後、捕虜となっていたスペインから解放された時、さらに 1530 年 7 月には子供たちも身代金とともに解放された時※には、感謝の行列を行った。これらのプロセッションは周辺から市内の修道院や聖堂参事会教会、サント・シャペルやドミニコ会に向かってサン・ジャック通りを進むのが常であった。

※カール 5 世の監視下に置かれてマドリードで人質生活を送っていたフランソワ 1 世の 2 人の息子、フランソワとアンリが、カンブレーの和約（貴婦人の和約）によって、200 万エキュの身代金と引き換えに解放された。

行列した参事会員や聖職者、大聖堂の司祭らが先行し、聖母やサン・セバスチャンの聖画

を持った聖職者らも同じように詩編やアンティフォナ、聖母のリタニー（連禱）を唱え、また国王のため祈りながら行列に加わった。このような王室のための祈りは古くからの歴史あるもので、13 世紀の教会の典例法規、聖務日課書に「preces pro rege et suo populo」（王と民のための祈り）として見ることができ、後世に至るまでミサ典書に受け継がれ主祭壇での典礼にも使われた。「主よ、国王を救い給え」Domine salvum fac regem という請願は、ジャン・ムートンのような宮廷作曲家や他の作曲家によっても作曲され、王のためのポリフォニーのモテットの中にも取り入れられた。このモテットは 17 世紀初頭、ルイ 14 世の時代に至ってもパリの参事会員・司祭らが行うすべての荘厳ミサの最後につけられるようになる。同様に小詩句「ああ、救いのホスティアよ」O salutaris hostia が 1512 年、ルイ 12 世によってガリア教会の典礼に導入された。ノートルダムでもサンクストゥスとベネディクトゥスの間、聖変化（聖職者がカリスを掲げる）の時の曲として歌われた。
この慣例は 1517 年 2 月 17 日一度取り止められるが、1521 年 pro pace et unione principium et huius regni（共同体及びこの王国に平和を）としてすぐ復活した。1524 年 7 月、フランソワ 1 世は小詩句が荘厳ミサで永遠に唱えられるように 240 エキュの金を寄付しようとした。しかし参事会は当初この寛大な申し出を丁重に辞退した。後日 O salutaris hosttia はカテドラルの典礼に再び取り入れられ、フォーブルドン fauxbourdon※、もしくはポリフォニーとして作曲され、ノートルダムの聖歌隊によって正式な歌として、17 世紀にいたるまで歌われた。（→これは純粋にご聖体の歌なので現代でも歌われる。）

※fauxbourdon（フランス語で偽りの低音の意）　最初に用いられたのはイタリアであると考えられるが、中世後期から初期ルネサンスに、特にブルゴーニュ楽派の作曲家たちによって用いられた和声技法である。平行和声の単純な響きが、多くは典礼文による歌詞を聞き取りやすくしている。

（複数の作曲家によって多くの曲が作られた中から、一例としてラリューの「ああ、救いのホスティアよ」を試聴）

中世後期から初期ルネサンスを通して、成人の歌手は宮廷や貴族階級ほど、ノートルダムでは望まれていなかった。逆に保守的なカテドラルの歌手は宮廷では望まれていなかった。複雑な寓意的音楽はその地位のステイタスの象徴であり、宮廷ではポリフォニーを歌うテクニックが求められた。例えばそれは以下のような事例に見ることができる。1415 年、ブルゴーニュ宮廷でのトマス・オピネル Thomas Hoppinel、1453 年のオルレアン宮廷におけるジャン・パニエ Jean Panier、1451 年(？)のシャルル 7 世の宮廷でのマルティン・コートリス Martin Courtois などである。1506 年、王室礼拝堂サント・シャペルにおけるピエール・ブロンドーはいくつかの例外があることを証明した。ブロンドーの音楽活動は王の宮廷とノートルダムを行き来して行われた。音楽のレパートリーに関してもこの一人の音楽家によって教会や宮廷、印刷業者を相互に結びつけられることを実証することとなった。彼は宮廷とカテドラルの間をつなぐ、例外的な人物であった。

※res facta　即興演奏に対し、予め楽譜に書かれ、準備された対位法の曲。

ピエール・ブロンドー Pierre Blondeau は、トゥールーズ地方の出身で、おそらく 1479 年頃に生まれた。彼が最初に記録に現れるのは 1502 年 10 月 2 日、ノートルダムのクラーク・オブ・マタン（朝課を歌う若い聖職者）としてである。彼は着実に階級を昇り、聖職禄なしから 1505 年 10 月 24 日、サン・ジャン・ル・ロン教会の聖職禄のある副助祭になる。同年 12 月 19 日副助祭に、1509 年 3 月 24 日には助祭に、そして最終的には同年 4 月 7 日に司祭となり、翌月、先述の聖セバスチャン聖堂での結婚式の司式が初ミサとなった。
1506 年初めの頃から、彼は大聖堂の許可があってもなくても、休暇で不在にするようになった。この年の 2 月 25 日の大聖堂の記録に、参事会員らがブロンドーに対して法的措置を取ろうとすることが見える。それは聖職者である以上、そこに住みこんで典礼を奉仕するという誓約をしたのに、ブロンドーが絶えず規則を破っているからであった。その上、近くのサント・シャペルで日夜典礼を歌うため別に雇用されていた。少数のノートルダムの参事会員は、典礼などの神聖な業務を行うのにとても必要とされており、王のための典礼を行うため、下級の聖職者は常住することを義務づけられていた。ブロンドーに対する告発は、彼の後任としてふさわしい人物を見つけることで取り下げられた。1507 年 3 月 29 日、ついに参事会はブロンドーの辞表を受け入れた。彼はパリのサン・ルイ聖堂、聖マルセル教会の礼拝堂付き司祭となり、ピエール・アーチボルト Pierre Archibault はノートルダムにおけるブロンドーの職務を代わりに引き受ける。その際、聖職録を置き換えることをした。地方の教会の肩書きだけもらうような職位の交換を行い、それによって大聖堂にいつもいなくても済むようにし、1 年おきに行ったり来たりすることを繰り返した。
たとえば 1509 年 11 月にシモン・ベラン Simon Belin という歌手と聖職禄を交換し、アミアンの司教教区にあるデュリー教会 Dury の教区助祭に名義上就任した。しかし彼は恐らく、無名の立場として宮廷の儀式に参加していたであろう。まもなく、彼はカテドラルに戻ってくる。1513 年 4 月 4 日、サン・ジャン・ル・ロン教会 St.Jean le Rond の副助祭として名前が見える。また聖歌隊のために新しくグラドゥアーレを写譜したことに対する謝礼の記録が残っている。彼は写譜家として重宝され、その写譜の義務のためにミサや晩課、朝課に出ることを免除された。もっとも、自分が当番の時は司式はやらねばならなかった。数ヶ月の後、7 月 2 日の参事会の記録にブロンドーは再び出発のための準備をしたことが見える。

6 月 18 日、参事会は「優秀な音楽家で、長年教会や聖歌隊、そのほかでも歌っている経験豊かな歌手」だという、オンフレ・フレメンテレ Honfridus Frementel をブロンドーの代わりに採用した。数年間ブロンドーはノートルダムを去ったからだが、それはルイ 12 世によって、新たに就任した教皇レオ 10 世のもとへ派遣されたからであった。ローマまで彼に同行した歌手らによって音楽が伝わったかもしれない。どのくらいの期間滞在していた

か疑問だが、多分その歌手の中に三人の「小さいカントール（少年の歌手）」すなわち、Jean Conseil, Hilaire Penet, Pierre de Monchiaron　らがいた。1513 年の末頃、ルイ 12 世は教皇レオのもとに彼らを派遣した。コンセーユは、（この頃せいぜい 14 歳であるが）以前ブロンドーがサント・シャペルで歌っていた頃、そこの少年歌隊員だった。
多分そのグループの中には Elzear Genet,　別名 Carpentras （1470～1548）※も ルイ 12 世が教皇レオの要請によって、教皇の在位中を通して滞在した中にいたであろう。

※カルパントラ　レオ 10 世とクレメンス 7 世に仕えたフランスの作曲家。彼の作品は、マニフィカト、哀歌、詩篇、賛美歌、モテット、世俗的曲。彼の哀歌は教皇シクストゥス 5 世（1587 年）の時代まで、システィーナ礼拝堂で毎年行われた。

また若いアドリアン・ウイラーAdrian Willaert もローマに赴いている。多分、1518 年にレオ 10 世の指示で編修されたローマのメディチ写本 Medici Codex やボローニャ市立音楽博物館所蔵のボローニャ写本 manuscript Bologna にはジョスカンやムートンらの錚々たるフランス・フランドルの音楽が収められている。確かにルイが送った歌手らによって音楽の交流が行われた。ブロンドーはパヴァーヌやガイヤルドといったイタリアの新しい音楽を吸収し、またのちに器楽音楽もフランスにもたらした。

ブロンドーは 1521 年 3 月にノートルダムに戻る。この時はサン・ジャン・ル・ロン教会の副助祭としてではなく、もっと下位の聖職禄のないクラーク・オブ・マタンとしてであった。それは見かけ上明らかな降格であったが、実際にはブロンドー自身の要望であったかもしれない。クラーク・オブ・マタンは、聖歌隊長 rectores choriy や司祭のように不可欠の職務ではないし、この下位の歌手の地位は彼のパリでのほかの断続的な仕事のためには充分だったかもしれない。ブロンドーは 1520 年代、このノートルダムのクラーク・オブ・マタンというささやかな地位に留まり続けた。1528 年から 29 年の冬の間の 2 つの参事会の記録は、彼の本当の価値は聖歌隊が使うための音楽の書物を手がける能力であったことを示している。

P,224～

彼は同時に大聖堂のための聖歌集（恐らく単旋律の）を作成、また、彼はパリで世俗の音楽の写譜をすることに忙しく従事していた。1530 年 2 月、彼は「18 低音のダンス」を、ハープ通りにあるピエール・アッテニャン Pierre Attaingnant の楽譜印刷工房から刊行した。ヘルツの説得力のある論拠に従えば、ブロンドーは多くの舞踏曲の作曲家というだけでなく、既存の曲を編曲・編集したり写譜する仕事をしていたのであろう。彼はパリで 1529 年 10 月に恐らくアッテニャンの工房から、リュートのための非常に短い家庭演奏用序曲集を出版した。さらに、6 つのガイヤルド Six Gaillardes と 4 声の器楽舞曲とシャンソンが含まれた新しい低音の舞曲集 Neuf basses dances を改訂しアッテニャンのところから出版する。それらの多くはもともと宮廷作曲家、特にクロー・ド・セルミジ Claudin de Sermisy

によって書かれたものもあった。セルミジは当時実質上の宮廷楽長であった。
ブロンドーの現存する最後の記録は、宮廷において 1532 年から 33 年にかけてフランソワ 1 世の教会の写譜家(ノッテール、記録する人 noteur)としてである。我々は既にブロンドーが 1534 年にアッテニャンのところから出版したノートルダムの少年聖歌隊のための本にセルミジの三声のアヴェ・マリア、高い声部だけの曲がいくつか残されている事を見てきた。ことによると、サント・シャペルだけでなく、ピエール・アンリに随意奉仕するためであったかもしれない。司祭に敍階されたピエール・ブロンドーは輝かしい王の宮廷と喧噪の中のアッテニャンの店の商売の間を、さらに静かなノートルダムの内陣の上のギャラリー（仕事場）を易々自由に行き来していたのだろう。ブロンドーの活動はルネサンス期のパリの音楽が急速に普及する、一つの橋渡しを担ったことを示唆している。

ブロンドーのような、大聖堂から宮廷への音楽家の移動の事例は時にはあったにせよ、もう一方の往来、つまり宮廷から大聖堂へ派遣される場合の方が圧倒的に多かった。

我々は、国王ジャン 2 世は 1350 年にヴィトリーde Vitry※１を、ルイ 11 世は 1463 年にオケゲムを、フランソワ 1 世は 1517 年にロングヴァルというように、国王がそれぞれ音楽家を聖堂参事会に送り出したのを見ることができる。またフランソワ 1 世の手腕はほかにも、1506 年に教皇レオとの間で、ガリア教会での高位聖職者の任命権は国王にあるとする、ボローニャ協定※２の半ば強引な締結に見ることができる。

※フィリップ· ド· ヴィトリー （1291 - 1361）フランスの作曲家で音楽理論家、詩人。アルス・ノヴァの作者。

※高位聖職者の叙任権を国王に認めるもの。

本来、司教の叙任権は教皇にあるのだが、国王はそれ以降、大司教 10 人と司教 82 人（パリのも含む）を正式に任命できるようになる。そのため、国王に選ばれた司教が参事会員を指名し、次にその参事会員が聖堂参事会の主席司祭を指名した。このように大聖堂全体の管理体制は宮廷の勢力によって効果的に国王の影響下に置かれたのである。
1518 年に選出された主席司祭ギヨーム・イーGuillaume Hue はその典型的な例である。まずフランソワ 1 世は、ピエール・ムートンとアントワーヌ・ロングバルを宮廷からパリの大聖堂へ派遣し二人とも参事会員とした。
この頃選出された参事会員はイーのように圧倒的に王室に関わる候補者が多かった。
1544 年頃にはパリの聖堂参事会は完全に以前の選出の方法を失ったようだ。このようなことから、もともとノートルダムが持っていた古くからの独自性が、第二ラテラノ公会議（1215 年）やシャルル 7 世のブールジュ国事詔書（1438 年）によって抑圧され、損なわれるようになった。しかしこのパリでの事例は教会の権威が衰退し、国王の権力が強大となっていった時代の大きな流れ（→絶対王政）の前兆に過ぎない。

とりわけパリの聖堂参事会は大学や議会、大評議会 Grand Council の近くにあったため、

神学者、中でも宮廷が好んだ法学者といった知識の宝庫としての目的のため利用された。聖堂参事会の一部は音楽家は少数に留まり、さらにほんの一握りの作曲家でもある参事会員については８章で論述する。何といってもフランソワ 1 世は「優れた教養を持ち、芸術の自由主義者でもある文芸の復興者」として参事会に対し適度に広い視野を持っていた。フランソワ１世の治世の間に参事会員となった、ギヨーム・クレタン Guillaume Cretin（オケゲムと Lourdault の追悼詩※を書いた詩人であるが）は 1520 年に matricularius clericalis に任命された。ジョバンニ・バッティスタ・ロッソ Giovanni Battista Rosso は国王がフォンテーヌブローで仕事をさせるために連れてきたイタリアの画家で、1537 年に参事会員となった。詩人であり歌手でありまた国王の司書であった Claude Chapuys は 1539 年に参事会員に任命された。

※フランスの宮廷詩人クレタン（Guillaume Crétin, 1460- 1525）がオケゲムの死に寄せた詩。（「けしからぬことだ、彼ほどの才能の作曲家が 100 歳にならずして世を去らねばならぬとは」）

フィレンツェからやってきたロッソは、ローマのミケランジェロとラファエロの影響下にあってそのスタイルを受け継いだ。彼は 1537 年 9 月 27 日に参事会員に任命されたが、同じ年 11 月の 3 回の日曜日ごとに、聖職禄の 3 つの敍階を 1 つづつ（侍祭、副助祭、助祭）上がった。恐らく、参事会員であるためには教会の中でささやかな肩書きが必要であったからであろう。しかしながら、彼が 1537 年 12 月に行った教会のアーチ型の天井修理に関しての助言や、翌 1538 年に聖歌隊席に使徒書を納めるための新しい銀の箱を作り、またフランソワ 1 世が 20 年前に取り壊した石の間仕切りに代わる銅の間仕切りの最終的なデザインをしたことに見られるように、芸術と建築上の問題に関してはその肩書は必要なかったといえる。芸術的才能を持った者が王室によって参事会員に任命された。しかしオルガニストのピエール・ムートンは芸術的才能だけでなく、彼の同僚の参事会員にとっても、有能であることを最終的に証明した。

P,226～

我々が知るピエール・ムートンの最初の記録は、1502 年カテドラルに附属する４つの教会のうちの一つで聖堂参事会教会サン・メリー教会のオルガニストとしてのものである。1509 年 4 月 22 日、彼はどうやらルイ 12 世の王妃アンヌ・ド・ブルターニュのオルガニストとして奉仕していたらしく、彼の名前はアンヌの教会のメンバーとして Jean Holliugue dit Mouton（明らかに何の関係もないが）に関わる記録にオルガニストとして記録されている。1514 年に王妃が亡くなるとオルガニストのピエール・ムートンと歌手兼作曲家のジャン・ムートンの二人はその教会を去り、王妃の夫であるルイ 12 世の教会に移り、さらにそのアンサンブルは 1515 年 1 月 1 日、フランソワ 1 世の宮廷に継承された。
ピエール・ムートンはアンヌ王妃に仕えていた頃の 1509 年 12 月 19 日、パリの参事会に派遣されるが、その登用の記録は司祭であり芸術家であったことを示す。しかし当初彼がほ

とんどの時間を過ごしたのは国王と王妃とともに南仏のロワール渓谷にある宮廷であった。フランソワ１世時代以降は、参事会員となり国王と教会の主な仲介者となった。1515 年の４・5 月に彼は新たに戴冠した王に、カテドラルの少年聖歌隊員が優先的にコレージュ・ド・ナヴァールに入学できる特権を守ってもらうように依頼され、陳情した。
1517 年１月、彼は再び教会の特権を議論するため王のもとに赴いた。ことによるとボローニャ協定による妥協であるのかもしれない。
1515 年から 1520 年代を通じてムートンはノートルダムと王の教会を行き来していた。
記録には彼が職務に忠実に参事会には 1515 年の間はほとんど毎週 3 回出席していたことがみえるが、10 月 19 日以降は記録から急に姿を消す。マリミニャーノの勝利にともない教皇に会いにボローニャに行くための準備をするために国王に従って南仏に行ったためである。ムートンは翌年 7 月 9 日に帰国パリに戻る。しかしまたすぐに出発し、1517 年１月に戻る。
1518 年 2 月イーの選挙のためにロワールから上京した。
1520 年の春、フランソワ１世は（イギリスがフランスに保有していた領土の一部である）北部カレーの郊外に向かった。ヘンリー8 世との会見に臨むためであり、その会見のための仮設宮殿はのちに「金襴の陣」※The Field of Cloth of Gold（仏 Le Camp du Drap d'Or ）と称された。

※金襴の陣　大きな饗宴や音楽の宴、騎馬試合とゲームが行われ、テントと衣装は、会見の場がその名をとって名付けられたように、多くの金糸織り（絹と金糸で織られる高価な織物）で誇示されていた。グイド城の前には、およそ 10,000 平方メートルの面積をカバーする仮設宮殿がイングランド王の歓迎式典のために建てられた。宮殿は、中心の中庭とともに 4 つのブロックがあった。両側は長さおよそ 91m であった。唯一の頑丈な部分は、およそ 2m 半の高さのレンガでできた基礎であった。レンガ基礎の上に、10m の高さの壁が、材木枠にキャンバス地か布を貼って作られ、石かレンガに見えるよう塗られた。傾斜している屋根は、スレートに見間違える鉛色で塗られた油布で作られていた。同時代の人々は、宮殿の客が屋外にいるよう感じた、宮殿内の巨大な一面のガラスについて特にふれている。それは最もぜいたくな流行の品で飾られ、黄金の装飾がふんだんに備えられていた。赤ワインが外の 2 つの泉から流れていた。付属礼拝堂には 35 人の聖職者が仕えていた。フランスの王室礼拝堂には、ヨーロッパで最も優れた合唱隊に数えられた合唱隊がいた。ヘンリー8 世の随行員の規模は、一ヶ月で 2,200 頭のヒツジと、同程度の食品が消費されたという事実から推測できる。城の向こうの平原では、2,800 ものテントが階級の低い訪問客のために設営された。その服装でわかるように、贅沢に着飾った貴婦人と騎士たちは栄光と騎士道時代の道楽の復活を熱望し、あらゆる種類の山師、乞食、行商人が会場に押しかけていた。
その後の数日間、両王が参加した騎馬試合、互いの王妃をもてなした晩餐会、両国の参加者による弓矢の大会、レスリング大会も行われた。キリストの聖体祝日の日である 6 月 24 日、ウルジーがミサを執り行い、2 人の王は互いに別れを告げた。ミサそのものは、空飛ぶドラゴンまたはサラマンダーが参加者の上を飛ぶという怪事件によって中断された。迷信深い者たちはこれを大きな兆候とみなしたが、これはおそらく偶発的か故意に放たれた花火であろう。

ムートンは国王の従者というわけではなかったので、6 月 20 日まで大聖堂に留まったが、記念に行われる二人の君主と宮廷が行う合同ミサに、オルガニストとして参加するのに間に合うように急いで国王に合流した。
英国人枢機卿トマス・ウルジーThomas Wolsey がローマ教皇の特使として儀式を取り仕切り、3 人の枢機卿や 21 人の大司教が出席した。以下詳細を紹介する；

1520 年 6 月 23 日、土曜の朝、トーナメントや騎馬試合の行われる平原の中に足場が設営され、３と半分のメジャーの高さの３つのチャペルが造られた。急ごしらえながら最高仕様で豪華に飾り付けられた祭壇と装飾された多くの美しい聖遺物箱が用意された。右側のチャペルは二つの大変美しい金糸の布でできた天蓋があり、椅子の下には同様に美しい金の布が敷かれ、フランスとイギリスのローマ教皇の特使、枢機卿の Bourbon, d'Albret, de Lorraine らが着席するための調度品が整えられた。初めから終わりまで、チャペルの椅子はフランスの高位聖職者が占めていた。もう一方の側に準備された他の席はミサに出席する教皇・スペイン国王・ヴェネツィアほかの各国の大使が占めていた。このチャペルと国王と王妃のための祈禱所の間の空間に、２人の国王お抱えの歌手らが陣取り、双方の前方に同じ書見台が置かれた。昼頃、英国の使節が荘厳な三位一体の司教ミサを行った。まず入祭唱はイギリス側の歌手によって、繰り返しはフランス側の歌手によって歌われた。またフランス側のオルガニストが演奏する時は、イギリス側の歌手が歌い、イギリス側のオルガニストが演奏する時は、フランス側の歌手が歌うよう、相互に合意されていた。
その後、ピエール・ムートンはこの晴れがましい場でフランス側の歌手らと共にキリエの演奏を始めた。イギリス側のオルガニストによって「いと高きところに栄光」Gloria in ezcelsis が、「全能の父」the Patrem omnipotentem ほかの曲はフランス側のオルガン、サックバットやショームなど国王の楽士が加わった。それは心地よい響きを創り出した。サンクトゥスはイギリス側、アニュス・ディはフランス側、そして幾つかの甘美なモテットで終わった。（→これも一種の随意ミサと言える）

上記のことはこの会談における二つの陣営の意図的な交流を示し、二国間の協調を示す象徴と言えるだろう。この英国との会談は政治的にも音楽的にも意義のあるものであった。ムートンは国王のもとには留まらず、翌月曜の 6 月 25 日パリに戻り、洗礼者聖ヨハネ教会の記録によれば、恐らくこれ以後ずっと参事会員として過ごした。この突然の参事会への復帰は、恐らく彼の宮廷からの引退を意味する。彼はこのあとは宮廷に戻らず、人生の残りの 14 年は殆ど教会の日々の仕事をして過ごした。ムートンはますますパリの参事会員として大聖堂の日々の業務を監督するようになる。1522 年、議員 chamber となり、1533 年には教会の織物担当者 provisor fabric ecclesie 建物の保守管理事務の担当者に選出された。このような彼の背景を考えると、音楽に関して直接的にも間接的にも両方に関連して問題

に対処するのにふさわしいと言える。1524 年、あるパリ市民が、自分の若い妻がクラーク・オブ・マタンの家に閉じ込められたと訴えたので、ムートンが調査することとなった。他に 1518 年、1519 年、1520 年、1527 年、1531 年に聖歌隊のオーディションをし、1517 年 3 月には新人の少年聖歌隊員が聖職に就く時にトンスーラの世話人となり、またオルガン音楽に関する責任者ともなった。
1515 年 9 月にオルガニストのジャン・ピューJean Peu が亡くなった時に、ムートンは権限を与えられ、10 月 10 日、亡くなったオルガニストの代理としてジャン・ルニョー Jean Regnault を見出した。ルニョーは聖歌隊の中では歌手としての技量が高いと考えられていたので（オルガニストにはならず)、ムートンは 1528 年 3 月 14 日から 1529 年 8 月 6 日までオルガニストとして代理を務めた。ムートンが辞任したその時点でルニョーはそのポストに就いた。ムートンは 1534 年 5 月 11 日に教会の一人暮らしの居住区の中で亡くなった。翌日ノートルダムの聖歌隊席の入り口側の身廊に埋葬された。彼の墓碑はパリの参事会員としてだけでなく、シャルトル教区の Tremblay le Vicomte にある聖ジャンのアウグスチン修道会長という肩書きも明らかにしている。

ピエール・ブロンドーとピエール・ムートンの経歴は、彼らのような音楽家たちがフランソワ 1 世の治世の間、教会と宮廷をつないでいたことの証明であろう。それは、宮廷とノートルダムに相互に影響力を持つ音楽的実務者を意味する。
例えば、国王は 1530 年に一流の宮廷聖歌隊のパトロンとなる。王は宮廷に単旋律聖歌専門導入したがそれは多分、長年彼のパリの教会では、伝統的に単旋律で歌われてきた事に対する敬意であったのであろうか。式典の中の項目ではまだ音楽のレパートリーと執行の方法は、宮廷が模範となって教会での演奏に影響を与えることが多いが、国王の命令の時もあるし、教会が自ら模範として見習うこともあった。
例えば国王がノートルダムの典礼に出席するとき、彼の聖歌隊や高位聖職者や歌手は、ノートルダムの参事会員や下位の聖職者と、いささか異なる様式で典礼を行うため次第に教会も宮廷の儀式の要素を取り入れていった。もう一つの重要な社会的変化は、宮廷の女性の訪問者を禁止することについての緩和であった。王妃や高貴な女性らが参列するので、内陣に女性が入ることが許容された。例えば 1514 年 3 月 29 日、フランソワの最初の王妃クロードがノートルダムでの儀式に参列し、内陣に「フランソワの高貴な男女の従者」を伴って進んだ例の最初であった。

これらの機会に国王の宮廷聖歌隊とノートルダムの聖歌隊双方が存在し、宮廷のアンサンブルはカテドラル内における先例となった。国王がポリフォニーを歌う聖歌隊を連れてくるので、それまでは教会ではポリフォニーがほとんど演奏されなかったが、次第に演奏されるようになった。1514 年 2 月 15 日、ルイ 12 世の王妃アンヌ・ド・ブルターニュの葬儀が行われた。王位継承者であるフランソワは王妃の歌手にレクイエムを歌うよう命じた。

しかし 4 人の司教とピエール・ムートンを含む 4 人の参事会員が葬列で歌った。
また、1515 年 1 月、ルイ 12 世の葬儀でも王の聖歌隊がミサでレクイエムを歌ったが、恐らくポリフォニーであったと思われる。スペインで捕虜となっていたフランソワ 1 世が 1527 年 4 月に帰国した時には、ノートルダムの主祭壇で、司祭によって荘厳ミサが行われ、彼の歌手によっていくつかのモテットが追加された。
大聖堂においてポリフォニーは、王の存在がなくても、堂々と使用される事態となった。1531 年から 1532 年の間、1436 年の国王のパリへの解放を記念して大がかりなオルガン伴奏付きの楽譜を使い、ノートルダムの聖歌隊によって聖歌が歌われた。また、1552 年には聖母のミサが国王の子どもたちの幸福のため、マリア像の前で行われた。
Res facta による楽曲や聖歌集を使うことによって、これらの年月、宮廷聖歌隊の存在と実際の演奏によって漸次ノートルダムの音楽は変化していった。

パリの聖歌隊のイメージは主として定旋律と国王のためのポリフォニー音楽を提供することで、儀式の時のための器楽は 1535 年 1 月 21 日に行われた聖体行列 procession の記録によってはっきり伝えられている。
多くの市民が宗教的に参加したこの厳粛なイベントは、パリや他の場所での聖なる秘跡を異端のプロテスタントの一団が一斉に攻撃したことを償うようにと、国王が命じたものであった。この長い償いの行列は、サンジェルマン・ロクセ・ロワ St.Germain l'Auxerrois から始まり、ルーブルの近くを経てノートルダムに向かった。ノートルダムの聖職者の階級と国王の楽士については、フランソワ 1 世年代記に以下のように描かれている；

行列の後には参事会員、カントールと共にノートルダムの歌手、裳裾を引いたパリ大学長、聖遺物箱を運び、聖歌のアンティフォナやレスポンソリウムを歌いながら行進している。学長は、非常に豪華な金と銀のメイス maces（学長などの職位の権標を示す矛状の杖）を彼の前に運ぶ一人の学者と一緒に。…そしてその後ろには、王の希望によってオーボエ、ヴィオロン、トランペット、コルネットなどの華麗な器楽のメロディが王のお揃いのお仕着せを着た楽士によって演奏され、目にも耳にも楽しませる光景である。その後ろには、王室礼拝堂サント・チャペル付きの歌手らによって、華麗な随意の頌歌やモテットの歌声が散りばめられ、その調和は素晴らしいものであった。

それまでパリの通り街角を練り歩くような王室の器楽演奏家による音楽は、ノートルダムの参事会員は許さなかったが、1517 年 1 月、国王とカール大公の代理者は「テ・デウム」などのノートルダムの儀式が厳粛に、そしてトランペットやカリヨンや sonnanntz によって非常に美しい旋律で演奏され壮大な教会で行われることに同意した。
10 年後、仍ち 1527 年 6 月 9 日、英国の使節と国王が確固たる新しい英仏同盟を結んだ時のミサも同様の儀式で行われた。パリの無名の年代記録者によれば、再び演奏されたのは、

1529 年 10 月で、フランソワはいわゆる「カンブレーの和約」（貴婦人の和約）を、皇帝カールの大使とノートルダムで締結したが、その時に国王の楽士たちは教会内にいて演奏していた。

フランソワの楽士たちは主にファンファーレと儀式に関連した音楽を、王室用の入り口と出口で演奏した。それはミサの間、サックバットやショーム、コルネットの響きや王室礼拝堂付聖歌隊の声と密接に結びついていたかも知れない。それは「金襴の陣」でのクレドの時に起こった。これら世俗的な存在感ある演奏は、大聖堂側が教会内での器楽演奏に関して規範の逸脱であると考えさせるのに充分であった。これがこの時代のフランスのほとんどの大聖堂の態度であった。ノートルダムの聖職者は長きに亘り、教会内でのオルガン以外の器楽演奏を厳格な禁令によって固持してきた。14 世紀以来、その事は普遍的に見られる。

教父たちの敵意は世俗の器楽演奏家たちに向けられた。彼らはカロリング朝には、曲芸師、俳優や娼婦のグループと同等に見なされていた。カテドラルの聖職者によって毎年レントに読まれるノートルダムの法規においては、このような望ましくない団体は禁じられていた。（恥ずべき役者たち、道化師　et ystrionibus）サンス評議会 the Council of Sens（1141 年）のあと、1528 年パリでまとめられた同様の 16 の禁止事項からなる規則は、ノートルダムの聖職者によって頻繁に参照された。規則は記している。「我々は禁止する。役者やほかの演奏者が教会に入って打楽器やハープ、またはほかの楽器を演奏したり、彼らの楽器を教会内やその側では演奏してはならない」と。しかし、国王の行くところ、器楽がついて回ったので、ノートルダムに入る国王に付き従うことによって、トランペットのように国王の威厳を示す楽器であるとみなされるようになった。16 世紀に至るまで彼らの数と種類は絶え間なく増大した。

王室の器楽演奏家たちは、いつでもどこでも彼らが必要とされるところなら供奉した。一般的に、トランペットやサックバットやショーム（オーボエ）、ヴァイオリンの響きは王の存在を示し、偉大な権威やすばらしさを加えるのに必要だった。連禱に似た Laudes regiae（王を讃え、神聖化するために行われた短い儀式。10/13 のレポート参照）や英国王ヘンリー6 世の戴冠式のための精緻な器楽音楽は、王の国務に、より荘厳さを与え、その行いに正当性を与えた。1500 年以前、世俗的な楽器はノートルダムの堂内に入ることを容認されなかったが、最終的には 16 世紀になって王を引き立てることについてのみ認められることになる。こうして、統治者の庇護の下に器楽演奏家がフランスの大聖堂内に入って演奏した最初の例となった。同じようにネーデルランドにおいて彼らは、ほかの取引組合や信心会のような世俗的な施設に入ることも許された。王族が各地を訪問する時、演奏家が供奉することは珍しくなかった。古来からの器楽に関する禁止令は徐々に拘束力を失って

いった。参事会員は 16 世紀を通じて彼らの存在を容認した。そして次には国王の存在の有無に拘わらず、彼ら自身で演奏家を召し抱え始めた。
このように、国王によってノートルダムの音楽が変化するのである。

（M.F.）